

歌舞伎は、自由な発想をもつ大衆芸能だと思う。井上ひさしや三島由紀夫などの文学作品を元にした出し物もあるし、落語を元にした〈文七元結〉などの人情世話物もある。バラエティ顔負けのドタバタもあって、まさになんでもありの世界だった。

日本は概して、四角四面で融通のきかない国に見られがちだが、整列を解いた東京オリンピックの閉会式に象徴されるように、地軸さえぶれなければ、実はたいへん自由で間口の広い国柄だと、歌舞伎の多様な出し物をみていて思う。

銀座の歌舞伎座は、昼と夜の2交代、1ヶ月単位で演目が変わる。父の亡くなったあと約10ヶ月間、わたしはそのほとんどの演目に通った。当然、意味がよくわからないものもあったが、筋書きそのものが飛躍していたり、中途抜粋になっているものが多く、きっちり頭で理解できなくてもよさそうだった。

しかし、最上階というのは、花道も見えないし、肉眼では玉三郎と勘三郎の区別が辛うじてつくだけで、舞台からはるかに遠い。階下に見える1等席の観客が、どういうわけかいつもつまらなそうで、その半数が居眠りしているように見えるのも、癪だった。

夫が見かねたのか、あるとき誕生日プレゼントだと言って、1等席のチケットを買ってくれた。うれしくてうれしくて、東銀座の地下鉄の階段を、かけ上った記憶がある。

大好きな〈勧進帳〉は、弁慶の心情がいつもより細やかに伝わり、〈十六夜清心〉の玉三郎と孝夫は、はかなくも透きとおっていた。ただ、不思議な体験をした。眠いのだった。それは、つまらなくて眠いのではなく、独特のここちよさともいうか、一種の催眠状態だったかもしれない。幕見席にも、1等席にも、それぞれの座席事情があるのを知った。

喫茶店を営むようになってから、歌舞伎座にはとんと足が遠のいたが、今でも教育テレビで舞台中継があると、見入ってしまう。人間の愚かさがけっして裁かれず、どうしようもなく追いつめられて、せつなく、そしていとおいしい。